



相手の存在を体で感じ、自分を素直に表現する。そんなコミュニケーションの基本を学んでもらおうと、演劇と遊びの要素を取り入れた教育プログラムがある。名付けて「ドラマケーション」。開発した高等専修学校講師の正嘉昭さんは「傷つくのが怖い最近の子どもも、人間関係の味わい深さに気づく」と話す。

人間関係 体で感じて

演劇と遊び融合した授業、「ドラマケーション」



「ニコニコ笑い合っ ていく子どもも、実は傷つくことを恐れて体を硬くしている」と話す正嘉昭さんの授業の様子。二いずれも東京・新宿東放学園高等専修学校

ダンススタジオのような教室を歩き回る生徒たちが、同時にスッと止まった。合図や掛け声なしで息を合わせた十四人の顔に、少し誇らしげな笑みが浮かぶ。「いいですね。この瞬間がたまらない」と正さん。中学卒業者が通う東京高等専修学校(東京)の授業「身体表現1」は、ドラマケーションに直感的に動けるようにな

遊びには、すばらしい効用がある。と聞く。鬼ごっこで鬼になれば、孤独で悲しく悔しいが、それは虚構の世界の出来事。遊び終われば、ネガティブな感情は消える。「だからこそ、かつて子どもが遊んだ空き地や路地裏は『何でもあり』で、人と人が触れ合う際の喜怒哀楽を思い切って味わうことができな

表情、動作で意思疎通 他者認める心はぐくむ

ヨシが柱だ。

多彩なレッスン

喜怒哀楽味わう

表情や動作で相手や周囲の状況をとらえ、自分の意思や感情を伝える多彩なレッスンが続く。二人で背中合わせに床に座り、互いに体を預けながら立てるか。順番を決めない点呼のように一から数え、誰かと重ならずにいつまで続くか。ゲーム感覚だが、五感を駆使しなければならぬ。正さんは

「普通の生活にも役立つ」と言う。

半年の授業を終えた生徒たちには、自分と異なる他者を認め、理解し、打ち解ける懐の深さが身につくという。「良い子と悪い子、勝ち組と負け組など、すぐレッテルを張る親や世間を疑ってみる。ドラマケーションはそんな試みでもあるんです」と正さんは話した。

そんな遊び場がない現代の子どもは、狭い交友関係の中で場の空気を読むのは得意だが、傷つけ合うのを恐れ、思いを伝えるのは苦手。正さんは「その分、怒りや恨みなどネガティブな感情が内にこもって増幅し、事件や自殺の形で噴き出すのでは」と指摘する。この日の授業では、一人が台に上り、仲間が差し伸べる腕の上に身を投げるレッスンも。落差は約一・五

大学で演劇に熱中し、中学校で国語を教えながら演劇部を指導していた正さんが、演劇によるコミュニケーションの鍛錬に取り組みだのは一九八〇年代。マイムや即興劇を応用した「遊び」を考案し、人間関係に不慣れた教師らに試したのが、ドラマケーションの原点だ。